

ふみの会 ニュース

■発行 　ふみの会広報部
 ■発行日 　2006年8月10日
 ■連絡先 　藤川博樹
 　　　　　〒115-0045
 　　　　　東京都北区赤羽1-48-3-203
 　　　　　tel03-5249-5797 fax03-3901-6090
 ■編集 　中井、塚原、藤川、蒲原雅、佐藤、蒲原直
 　　　　　http://www.mdn.ne.jp/~fumi/top.html

No.296

9月行事日程

■ニュース編集

原稿はテキストにして下記へ
 ワード・一太郎文書も可
 kamo@sun.email.ne.jp
 エッセイ：5枚(2000字)
 小説：10枚(4000字)目安

■締め切り

9月20日(日)

■年会費

1200円(年)

切手80円×15枚

郵便振替：東京00170-1-18290



◆海岸沿いのレストランの窓の下が砂浜で、そこにトップレスの女性が甲羅干しをしている。この後、ブロード女性がやってきてこの茶髪女性とともに四つの乳房を並べて見せてくれた。昼食という日常の場に、非日常のヌードが現れることにドキドキしてしまう。女性たちは推定35歳くらいで、疲れ気味の体がよけリアルだ。(ニューカレドニア) 2002年8月

◆最近、ゴミ捨て場でパソコンを見かけることが多くなりました。たいていは日電の9800シリーズで、486とかせいで Pentiumの60MHzクラスのものです。時には100MHzのXa10やValueStar V10が捨てられてドッキリすることがあります。高くて手が出なかったものだからね。IBMやCOMPAQの133MHzマシンが捨ててあったときにも驚きました。◆しかし考えてみるとうちの押入れには266MHzのシンクパッドが眠っているわけだし、800MHzのマザーだつて余っています。100MHzクラスのマシンは使い道がなくなってくるのも当然です。Windows98とMEのサポート打ち切りが発表されました。パソコンも中のOSも使えなくなるわけで、捨てられるのもしかたがないのかもしれない。◆なんとXPもさ来年にはサポート打ち切りだとか・・・また後継のヴィスタが発売されてもいないのに、最新OSがさ来年までの命というの、いくらなんでも早すぎます。パソコンとソフトの寿命の短さは異常ですね。諸行無常の「ものあわれ」を越えて、悉皆成仏・ものみな息絶え、涅槃に入るという「世界崩壊感」さえもよおします。◆私がバイクに乗り出したのは30近くになった、1980年頃です。その頃のバイクには今でもたまに出会います。GSX1100カタナ、GPZ400F、RZ250Rなどです。メーターを見るとみんな10万キロを越えて、まだしつかり現役なのです。「がんばってるな」と思うものの、「なつかしいな」とは思いません。だって、しつかり走っているんですからね。◆あの頃のパソコンといえばPC8800、FM8など、今から見ればオモチャのようなマシンです。もちろん博物館以外に現役なんかいるわけありません。(いたりして?) バイクに比べると、パソコンはモノとしての命があまりに軽いです。◆ロックの世界を見るとまたまた70年代ブームです。フォークソングや和製ポップスもリバイバルしています。パソコン以外なら、ソフトもまた寿命は長いようです。考えてみると、この20年間が異常だったのかもしれない。何もなかった空間にパソコン文化が芽を吹き、成長し、やっと成年に達したのでしょうか。その成長の間に、いろんな歪みや曲がりが出るのも仕方なかったのかも。そう考えてみれば、歴史上まれな現場に立ち会えたといつことで、喜ぶべき時代だったのかもかもしれません。(な)

街中の似顔絵師 (三)

瀧本 文彦



僕はネオン街を渡り歩き、香水の香りに包まれ洋酒に囲まれ、客席に呼ばれウイスキーをいただき、話に

なかつただろう。しかし残念な事にその様なテクニックを持っていないかった。

イーリングをピアノにぶつけるのであった。

絶海の孤島「青ヶ島」であった。青ヶ島の住所は、東京都八丈島青ヶ島村無番地。八丈島から南方に67・7キロ先の周囲9キロの島である。島の最高点は、海面から423メートルの大凸部（おおとんど）と

相槌をうち笑顔をつくる。ピアノを弾き始めた動機はモーツアルトやベートーヴェンの音楽に心を打たれたからだった。流しのピアノ弾きをして流行り唄を弾く自分が情けない。

僕は一つだけバンドマンになつてよかつたなと思うことがある。それはジャズに出会えた事である。21歳の頃だったかジャズの魅力に取り付かれ、ジャズ喫茶に通いつめ、入り浸り、ジャズ喫茶を渡り歩き、LPを買つてはアドリブを五線紙にコピーした。

僕は老いるまでバンドマンを続ける自信はなく、ホステスさんやお客さんに「先生、先生」とおだてられ、「よう先生！一杯飲んでよ」とウイスキーの水割りをピアノの端にお客さんが置いてゆく。その水割りを飲みながらピアノを弾き、ほろ酔いで電車に乗り、アパートに帰る気せず、途中で馴染みのスナックに行き夜明け前まで酒を飲み憂さを晴らすのであった。

メートの北西部に有る鋭角に尖つた山である。島全体は典型的な複式火山である。島の中心にカルデラが在り、その中に223メートルの中央火口丘の丸山が盛り上がっている。

ある日、バーで「月光の曲」の第一楽章を弾いてやろうと練習をし、バーで弾いたのであった。ママさんが僕のそばに来て言った。

キャバレーのバンドではワンステーションはお客が居ない日が多く、バンドマンは殆んどと言つていい程ジャズが好きで大いにジャムセッションをやつた。出かける前に聞いたジャズのファイリングを体に沁みこませ、ワンステーションのジャムセッションの時、無裁夢中で聞き覚えたジャズフ

「酒とバラの日々」と言うジャズのスタンダードナンバーが有るが、僕の日々を何と呼ぼうか。30歳過ぎで女性の香水と色とりどりの洋酒とストリップバーに別れを告げ、其の後転々と職を変え、たどり着いた所は

複式火山の中央の丸山では今も噴気噴流が起きている。丸山の地面に穴をあけ、生卵を入れ、草で穴を塞いでおくと一時間足らずでゆで卵が出来上がる。薩摩芋を入れておくとほくほくの焼き芋となる。複式火山

「店が通夜の様になるのでそうゆう曲は止めてくれませんか？」

僕は納得した。僕は思った。リムスキー・コルサコフの「熊蜂の飛行」やシヨパンの「子犬のワルツ」を軽快に華麗にしかもニコニコと楽しく弾いたならあのようなことを言われ

は

は

弾いたならあのようなことを言われ

弾いたならあのようなことを言われ

弾いたならあのようなことを言われ

弾いたならあのようなことを言われ

の美しさと荒々しさの混じった不思議な島である。

時々夜空を見上げれば満天の星空。真夜中、ヒューと鳴る海から吹き上がってくる寂しい風の音。あのネオン街の喧騒に満ちた街との落差が大きく、島の周囲に広がる太平洋の彼方に居るのであろうか、僕は島民の苦難の歴史も知らず、現実の日々の生活の厳しさも知らずに、こう言う所が極楽浄土ではないのかと勝手に想像するのであった。不思議な心境であった。

かなスーツだけのシンプライフであった。

僕は文無しであっても無職だったわけではなく、水道下水道で営業をし、工事現場で宅地にツルハシやスコップを使って穴を掘り、下水管や水道管を埋めていた。仕事は真面目に行っていたが、給料を手渡されると、立ち飲み居酒屋や、若い女性の居るスナックや、近くにある、花園競輪場に通い、給料前には文無しとなっていた。



(3) ニュースの会ふみ

この島に来るまでに僕は京浜急行線の生麦駅近くの木造二階建てのおんぼろアパートに住んでいた。トイレは汲み取り式の共同便所。僕は二階の六畳ひと間に住んでいた。二階に上がる階段はギシギシ鳴った。僕は文無しで部屋には布団と、ダダイズムの作家、辻潤の著作集全四巻と、わずかな下着わずかなシャツとわず

僕は近所の質屋さんで、トランプやアルトサククスやクラリネット

トやフルートやオーボエに見とれていた。迷った末フルートを買った。他の楽器は練習する時、音が大きく隣近所に迷惑をかけると思ったからである。仕事を終え、たち飲み屋で刺身で焼酎を飲み、おんぼろアパートに帰りフルートを練習するのであったが、集中できず、上の空で吹き透かし屁のような音が出た。

日曜日の朝。階下からクラシック音楽が聞こえてきた。かなり大きい音量だった。クラシック音楽ファンがこのぼろアパートに居るのが意外だった。聞こえてくる音楽は交響曲だった。ドボルザークの交響曲第九番「新世界より」、ベートーヴェンの交響曲第五番「運命」、交響曲第六番「田園」だった。僕はこれらの音楽を聴いても何の感動も起きなかった。懐かしい音楽が聞こえてくるなと思う思いしなくそれらの音は僕の耳を素通りしていった。

ある日、仕事を終えスナックで酒を飲み店の女性と取り留めのない話

しをしアパートに帰りぼつねんと座っていると、寂しさがこみ上げてきた。一年前、友達から教えてもらったある女性の電話番号をふと思いだした。手帳を探し、女性の電話番号を見つけた。会ったこともない見知らぬ女性である。明日電話しようか迷った。孤独が勝り電話してみようと決心した。

翌日、見知らぬ女性に電話をかけた。その女性が電話に出た。僕はどう言う経過で電話番号を知り、どのような気持ちで電話を掛けたかを話した。電話に出た女性は冷静に僕の話の聞いていたようだった。僕は会う日と時間と場所を指定した。電話の向こうで僕と会うことを約束してくれた。

(つづく)

一人ぼっち



内田幸彦

(四) 無くした運動靴

やっと六時間の授業が終わり、校門を見た。四時間位ならまだしも、六時間の授業はうんざりする。校門を出るとホッとした。

校門を出た彦一は「今日はこれだッ！」と午後の遊びのプランが閃いた。もう銭湯は開いている。これに決めた。

帰るや、鞆を投げ出し、投げ釣りの釣り糸を出して十メートル程に切り、五銭銀貨の穴に通す。これを持って、銭湯に出掛けた。五銭玉を餌に人を釣ろうというのである。

当時(一九三〇年代——昭和の初め頃)は午後二時には銭湯が開いていた。男の子らは雨が降ると戸外で遊べないので、銭湯が遊び場になる。独楽をすり合わせたり、桶を浮かべわりに泳いだり、イカを作って浮かべたり、シャボン玉を作ったり、特に冬には格好の遊び場だった。

午後の二時に来る風呂の客は、隠

居した老人や水商売の芸者・仲居・女給・二号さんの女(ひと)が多い。彦一の狙いはあとの人達だ。爺さんでも男は怖いから願ひ下げである。

彦一は「松の湯」の入口の大きな暖簾の下に五銭玉を置き、釣り糸の端を持って男湯の入口のガラス障子に隠れ、相手を待った。危険になれば、番台の前を通り、反対の女湯の入口から逃げればよい。

当時、一銭(今の三〇円くらいか?)で手の平くらいのお焼きや大きな飴が二つくらい買えたし、銭湯でも大人四銭だったから、餌にした五銭玉は大人でも拾う価値はあると彦一は思った。

十分、十五分と待ったが、客は来ず、少々苛立つて表をソツと見に行つた。

《来た、女客だッ!》
小脇に手桶を抱え、空いた右手を袂に入れて寒そうにやって来る。

彦一は素早く男湯の入口に戻り、ガラス障子を閉め、釣り糸の端を持って待った。胸がドキドキして来た。

女客は髪を気にしながら腰をかがめ暖簾を分けて入った途端、五銭白銅貨に気付いた。彦一は息をひそめ、今か今かと見守つた。

瘦せ形の色つばい女客は四十前後か、多分二号さんか仲居さん、或いは芸者か、水商売の女(ひと)に違いない。

五銭玉を見付けた彼女は、先ずキヨロキヨロと辺りを見回し、人目がないのを確かめてから空いた手を伸ばした。手が五銭玉に届くか届かぬかの瞬間、彦一は釣り糸を軽く引いた。五銭玉はピョンと跳ねて逃げた。まだ悪戯に気付かない女客は続いて手で押さえようとする。彦一は糸を引く、女客がまるで蚤取りをしているようで、思わず彦一は吹き出した。気付いた女客は鬼女のような怖い顔で彦一の隠れている男湯の入口に迫つた。

《ばれたッ!》

彦一は予定通り、忍び足で番台の前を抜け、反対側の女湯の入口からガラス障子をガラリと開け、表へ跳

んで出た。男湯に近づいていた鬼女は素早く振り返り、

「待てッ! 糞(くそ) 餓鬼ッ!」

女の怒声を背中であきながら、彦一は一目散に我が家へ。玄関に腰を下ろし、ドキつく胸をさすってホッとした。

落ち着くと、餌にした五銭玉もズック靴も銭湯に置いてきた事に気付いた。あの場合、靴を履く間はなかつた。ズック靴は買ってもらったばかりで、まだ三、四日履いただけの新品だった。

「まあいいか、あれだけ面白かつたんだから」と割り切つた。今更、銭湯へ靴を取りに行く勇氣はなかつた。彦一は母に言う尤もらしい嘘はないものかと考えた。

二、三日して、母がズック靴に気付いたので、

「学校の下駄箱に入れて置いたらなくなつた」

そう誤魔化した。母は真に受けて、「日曜日まで辛抱しなさい。また買ったげるから」

と話は収まったかに見えた。

翌々日、夕食の時、母が、

「今日、松の湯さんからお前の靴を持って来てくれたけど、なくしたの学校じゃなかった？ お前、どうして帰ったの？」

母の目は疑惑に満ちていた。彦一はグツと返答に行き詰まった。

(五) 家

彦一の父・梅三郎と母・英子（ひでこ）は大正中期の一九一九年頃、大恋愛の末、周囲の反対を押し切つて結婚している。昭和の初め（一九三五年頃）でも、まだ土農工商の意識が根強く残っていたから、大正中期には町人の娘と武家の三男の結婚は当然難しかった。

母方の祖父・辰吉は外に女をつくり、家を捨てていたから、祖母の豊（とよ）は近所の手伝いをしたり、裁縫をしたり、魚を売り歩いたりして娘を育てていた。

(5) 父の梅三郎は岸和田藩の下級武士の家に生まれている。それで、父の側はもつての外だと猛反対したのである。

祖母の辰吉は彦一が小学校四年生の時、外で亡くなり、花（はな）・英子の姉妹で葬式を出した。彦一は祖

父のこともよく憶えている。

辰吉は極道するだけあって、面長な顔に細い目が優しく、歌舞伎役者を思わせるいい男だった。それに引き替え、辰吉が外につくった色女というのは女の布袋さんといった肥ったダラシない女で、祖父がよくもこんな女と一緒に、と彦一は子供心にも思った記憶がある。

それでも父は諦めず、養子となつて外田の姓を名乗り、恋を全うしたという。

母・英子は子供の頃、女学校へ上がりたかったが、家の事情を考えると、とても口に出せず、諦めていた。だが、或る日、小学校の校長先生が訪れ、祖母の豊に、

「英子を女学校へ上げてやってくれないか。あんなに出来る子を可哀相で」

と頼みに来た。豊は恥を忍んで亭主の体たらくを打ち明け、

「女三人、食べてゆくだけが精一杯……」

と断つた。校長先生は、「どうだろう、学費を儂（わし）に出させてくれんか。永年勤めて貯金もあるし、辞めても恩給が入る。学費を出してもらうのが厭なら、出世払いでどうだ。出来たら払えばいい。」

それなら文句はなからう」

これには豊も断りようがなかった。英子に話すと、踊り上がらんばかりに喜び、校長先生の好意に甘える事になった。

女学校の入学試験に合格した英子は、最初の一年間は校長先生のお世話になったが、以後卒業するまでの三年間は秀才として特待生になり、奨学金を利用することが出来た。

英子は念願どおり、女学校を卒業するや、小学校の先生（当時は訓導と呼んだ）となり、紺の袴に矢絨の羽織で学校へ通うようになった。その初々しい姿に、近所に住んでいた父は、すっかり魅せられてしまったのである。

女の子は父に似ることが多い。英子も十人並以上の器量だった。外田の血筋には美人が多く、宝塚歌劇団に入った娘もいれば、難波新地で芸者や女将になった女もいて、水商売の者が多いらしい。それに引きかえ、父の家系は下級武士だけに醜男（ぶおとこ）が多かった。この二人同士は望み望まれて結婚したのである。

父は鉄道員、母は小学校の先生の共稼ぎということで、彦一の家は裕福だったが、子宝には恵まれなかった。薬を飲んだり、注射をしたり、

湯治に行ったり、苦心の末に出来たのが問題児の彦一だった。それも二度流産し、三度目にやっと生を享

(う)けたという。

叔母の花と母の英子は家を捨てた辰吉に仕送りをしていた。母を苦しめ自分たちを捨てた父を。彦一も時々その仕送り届けるお供をしたことがある。行くと、辰吉の女は決まってキントン飴を二箱くれた。だらしなない彼女は何時も着物の胸をはだけ、不潔な感じが抜けなかった。彦一は、「こんな女のどこがいい？」と思つた。十や十一の彦一に男女の機微が判る筈もない。

祖母の豊は気丈な女で、辰吉が家を出てから女手ひとつで娘二人を育てた。頑丈な体つきと鋭い眼光が、その女丈夫のような強い性格を表していた。苦勞した祖母は夫の辰吉より十年も早く逝つてしまった。

彦一も大人になって、賢い女より平凡でいいから女らしく優しい女がいいと思うことがある。祖父の愛した布袋さんにも、どこかにいい所があったのだろう、と思うようになった。

(つづく)

鈴木家の鬼火

蒲原直樹

「ゆうべねえ、夜中におじいさんが浮かない顔をして立っていたんだよ」

朝の食卓で祖母が話し出したとき、家族はギョツとした。

「おじいさん、なんだか心配そうに部屋の中を見回して、あたしに何か言おうとするんだよ、でも声が出ないらしいんだ」

「おばあちゃん、それ、夢の話？」
孫娘の美保子が井飯をかきこみながら言った。混沌三中女子サッカー部の彼女は朝練のために腹ごしらえがしているのだ。試合のたびに応援に来てくれたおじいちゃんは去年の暮れにクモ膜下出血でこの世を去っている。

「いやあ、ちがうよ。夢なんかじゃないよ、あたしは、まだ眠れなくて本を読んでいたんだから」

「やめてくださいお母さん、おじいちゃんが迷って出てくるわけないじ

やないですか」

味噌汁を載せたお盆を運びながら母親の菊代がたしなめる

「そうよねえ、わたしたちに見守られて、安らかに死んだんだもんね」

美保子も同調した。
「しかしなあ、おやじは無口だったからなあ……」

パジャマ姿で新聞を広げていた父親の高明が顔を上げて言った。

「なんか言い残したことがあったのかもしれないぞ、そうなるわけっこしつこい性格だから、戻ってくることもあるかもしれない」

「変なこと言わないでよ、あなた」
菊代が眉をひそめた。怖がりの彼女は幽霊話が嫌いなのだ。

「しかしなあ、言いたいことがあるんなら、おふくろんとこじやなくてオレのところに来ればいいのに、水臭いよなあ」

「やめてつてば」
「行つてきまーす」

ドタドタとほこりを巻き上げながら美保子が台所を走り出て、この日の話は終わった。しかし翌朝も祖母の話は続いたのだった。
「おじいちゃん、夕べもやっぱ現れてねえ」

祖母がそう切り出すと、家族の間に電撃が走った。

「こんどは何か、書斎のほうで探しているようなかつこうだったんだよ。あたしは『おじいちゃん、なにを探しているの?』って聞いたんだけどねえ、悲しそうな顔してこちらを見ただけなんだよ……」

朝の食卓は静まり返った。誰も何を言っていないのか分からなかったのだ。息子の高明は母親のボケを怪しみ、その妻の菊代はまた幽霊が出たのかと肌を粟立つ思いだった。孫娘の美保子だけは、どうしたら祖母の正気を証明できるのかを考えていた。

「じゃあね、おばあちゃん、今夜はあたしがいつしよに寝るよ。おじい

ちゃんが出てきたら起こしてよ、あたしが何を探しているのか聞いてみるから」

「だじょうぶ?……連れて行かれたりしないかしら……」

菊代はこの提案に不安そうだった。高明は「まあ、やってみろ」としか言わなかった。

その夜、部活で疲れた美保子は祖母の隣りに敷いた長座布団の上でたちまちいびきをかいて眠ってしまった。その肩を揺さぶって起こされたのは真夜中のことだった。

「来てるよ、そこに」

祖母に小声でささやかかれて、美保子はしばらく意味が分からなかった。しかし顔を上げて書斎の入り口を見るとき、目が覚めた。カーテン越しに差し込む星明りの中に、青白い顔の祖父がぼんやりとたたずんでいた。

「おじいちゃん……」
美保子は怖さを感じるよりも、お

となしく優しくあった祖父に対する懐かしさがこみあげた。彼女はタンクトップに短パン姿で立ち上がり、祖父の幽霊のそばに歩いていった。

「なにを探しているの？……なにか気がかりがあるの？……美保子におしえてちょうだい」

祖父は無言だったが、その視線の先には書棚があり、引き出しがあった。美保子は書棚の最下段の引き出しに手をかけて言った。

「これ？……この中になにかあるの？」

亡霊はかすかにうなずいたように見えた。そして次の瞬間見えなくなった。

「おじいちゃん、消えた……」

美保子が言うと、
「そうだねえ、美保子に会って安心したのかねえ」祖母が応えた。

それから二人は問題の引き出しを開けてみた。左右両方をひっくり返して調べたが、古い文房具、墨や硯、書簡や写真が出てきただけで、それらしいものは見つからなかった。「あれじゃないの？」祖母が指差したのは引き出しの裏の穴底で、そこに油紙の包みがあった。

包みの中には古い手帳があった。

それは祖父の戦時中の日記帳で、日付は昭和十九年になっていった。祖父らしい几帳面な楷書体で、米粒くらいの文字がびっしり並んでいる。内容は旧字体の漢字とカタカナなので祖母にしか読めなかった。

『十月末日、台北ニテ現地召集サル。三日間ノミ訓練ヲ受ケ、ノチ南方行ノ船ニ乗セラレル。行先ヲ知ラズ』で始まる日記は、凄惨を極めた。

祖父を乗せた貨物船はマーシャル群島を目指していたようだが途中で魚雷を食って撃沈、祖父たちは三日間海を漂流した後、漁船に拾われた。生き延びた数十人の兵士はそのままフィリピン部隊に配属となった。やがてサイパン、グアム玉砕の報が届き、フィリピンにも空襲が始まった。祖父たちはミンドロ島守備隊に加わり、米軍上陸を迎え撃つ。しかし圧倒的な空爆、艦砲射撃により戦線は寸断され、守備隊は壊滅的な被害を受け敗走した。祖父のいた防空壕は彼が伝令に出た数秒後に艦砲の直撃を受け、巨大な岩穴になった。台北からいっしょだった戦友はそこでみんな死んだ。砲弾が雨のように降り

注ぐ夜の海を小船に分乗し脱出、水も食料もない中を島から島へ人力で漕いで海峡を横断し、ルソン島に戻った。

休む間もなくマニラ攻防戦が始まり、補給のない日本軍はたちまち敗北した。主力部隊は山岳地帯に入りグリラ戦を挑んだが、祖父は足を負傷したために部隊を離れ、ダクハンから台湾へ送還されることになった。米軍航空部隊や潜水艦におびえながらも奇跡的に船は台北にたどりついた……ここまでが前半だった。



た。
「おじいちゃん、すごい体験したんだねえ」

「戦争中のことは一言も話してくれなかったから、あたしもこんなこと知らなかったよ」

祖母と孫娘は夜が明けるまで日記を読み続けた。後半、内容はガラリと様相を変えた。

台北に着くと祖父の家族はすでに離台しているということだった。台湾にも空襲はあったが本土に比べれば規模は小さく、建物はまだまだたくさん残されていた。祖父は足の傷も癒え軍務に復帰したが、手足の痺れが残るなど戦闘任務には不向きとされ、経理部へ回された。主要任務は「給養」であり、早く言えば食料の確保だった。陸軍経理部には兵卒がなく、祖父は軍属に混じって食料配給の手伝いをするようになった。そこで知り合ったのが陸軍慰安所の経営者だった。

「女の子たちが栄養失調じゃ仕事にならねえ」

そう言われて出来る範囲で配給物資に色をつけた。お返しに貰ったのが高い切符だった。将校用の高級慰

『日記ハ軍律ニ違ヘドモ、自分ガ死ネバ誰カ親兄弟ニ伝ウルベキヤ。明日ナキ身ニハコノ日記ノミガ生キルヨスガデアル』祖父はそう綴っていた。

安婦を酒肴つきで貸切できるのだ。

まだ十代で女を知らなかった祖父は興味はあったが、その切符を使うことが出来ず、大事にしまっておくだけだった。楼閣には上がらなかったものの台所にはよく立ち寄ったので、そこに暮らす女たちの様子はだんだんと分かってきた。慰安婦の大半は日本語もろくに話せない朝鮮女で、瘦せて小さいのでまだ十代半ばにしか見えない子も多かった。他はマンピー、ワンピーと呼ばれる満州女、台湾女らしかった。みんな絶望と諦めの影を宿し、明るい顔をした者は一人もいなかった。

そのうち終戦を迎えた。兵隊たちは武装解除を受けてキールン港へ移動し、そこから日本へ向かう貨物船に乗せられた。船の中を見物して回っていると、三等雑居席の片隅に慰安所の管理人と着物からチマチョゴリに着替えた朝鮮人慰安婦たちが固まって乗っているのを見つけた。

「女たちを置き去りにした部隊も多いと聞いたのに、連れて帰るとは感心だな」とその時は思った。しかし元直属の連隊長から呼び出された時にはいやな予感がした。

「鈴木一等兵以下、五人は慰安婦を始末せよ。港を離れたら女たちを甲板へ引き出し、海へ投げ入れろ」

連隊長の命令を聞いて祖父の頭は真っ白になった。

「連隊長殿、それはできません。戦争は終わったのであります、自分はいくら以上人殺しはしたくありません。もし、ぜひにといふのであれば、命令書をください」

「命令書など書けるか！」連隊長は一喝した。

「いいか、軍が直接慰安婦を徴発し、直属の慰安所を経営していたとなれば責任を問われる。そこに勤務していたおまえも同罪、それを利用して兵も同罪だ。ひいては天皇陛下の責任も問われることになる。だから慰安婦関係の命令は全て口頭で済ませることになっている。一切、証拠を残してはならぬのだ。おまえは、我々みんなを戦犯にするつもりか？」

言われて祖父はたじろいだ。兵隊たちにも動揺がひろがった。

「おまえがその気なら、かまわん」

連隊長は懐から南部十四年式軍用拳銃を取り出した。彼はその銃口を祖父の額にあて、血走った目で言った。

た。

「慰安婦を捨てる前に、先触れとしておまえの死体を投げ込んでやる」

祖父は驚いて意識が朦朧となった。生死の境を何度も潜り抜けてきた彼だったが、戦争が終わった後までそんなことが起こるとは思わなかったのだ。気が付くと甲板に女たちが集められていた。彼女らは「アイゴ、アイゴ」と泣き叫び、命乞いをした。空は曇り、時折り雨がばらつき、海は大波をたてて荒れていた。そんなところに投げ込まれて、生きていられるわけがなかった。しかし兵隊たちは情け容赦なく女たちを海に投げ込んだ。祖父の目の中で女の影が減って行き、やがて誰もいなくなった。

甲板は兵隊たちの陽気な笑い声だけになった。みんないやな仕事が付いてサバサバしているのだ。しかし祖父は自分の手に、女の瘦せかけた腰のさわり心地が残っているのを感じた。祖父は自分が年端も行かない哀れな朝鮮女たちをその手で殺したのだと気付き、号泣した。

日記はそこで終わっていた。朝日の中で、祖母と孫娘はため息をついた。

「おじいちゃん、これが心残りだったんだね。でも、これをどうしてほしかったんだらう？…：…罪滅ぼしのために発表してほしいと思っただらうか？」

「さあ、あたしにやなんとも言えないねえ」

祖母は首をかしげ、美保子にもどうすればいいのか見当が付かなかった。

「あんまりひどいもん、焼き捨ててほしかったのかもしいねえ…：」

どちらなのか決めかねて、美保子は両親に昨夜の出来事を話し、日記の処理について相談した。高明も菊代も彼女の話に心底驚いていた。そしてやはり「どうしたものか」と首をひねるだけだった。美保子は学校の先生に相談することにした。彼女の担任は女性で、今時珍しく社会問題に関心の高い人だった。担任教師は美保子の話を聞いて喜んだ。

「それはすごい発見よ。二十万人とも言われる朝鮮の若い女性が、強制的に駆り出されて大陸や南方で従軍慰安婦にさせられたの。でも組織的に証拠隠滅がされていて、わずかに

生き残った証人たちも嘘つき呼ばわりされているのよ。』もともと売春婦だったんだ』なんて言われて、二重の被害にあっているの。こういう証拠や証言がもつとあれば、被害者のハルモニ（おばあさん）たちも救われるわ」

教師はそう言って両親の許可を得るためにその夜、鈴木家へやってきた。菊代はあっさりとは公表に同意したが、遅れて帰宅した高明は首を縦には振らなかった。自分たちだけの問題ではない、と彼は言った。

「うちの鈴木家は混沌でも指折りの名家です。台湾にも大きな鉱山を持つていた。祖父の従兄弟は副大臣になったこともある。その鈴木家一族に戦争のどさくさとはいえ、人殺しがいるなどと宣伝されては大変なことになります。マスコミが押し寄せて好き放題のことを書くでしょう。右翼からも左翼からも攻撃されます。私たち一家には静かに暮らす権利があります。私は断固として一族の名誉と一家の平安を守る決意です」

「じゃあどうすんの、お父さん、おじいちゃんの日記、焼いちやうの？」
美保子は父親の腕をつかんだ。高

明はその手を振り解いて言った。

「むろん、そうするつもりだ。美保子、おまえも自分のおじいちゃんを人殺しにはしたくないだろう？……あの優しいおじいちゃんにそんなレツテルを貼って侮辱したいのか？それに、そんなことになったら、おまえは人殺しの孫になってしまうんだぞ」

「だって、本当のことなんだよ！」
高明はいつもとは別人のように怖い顔になって言った。

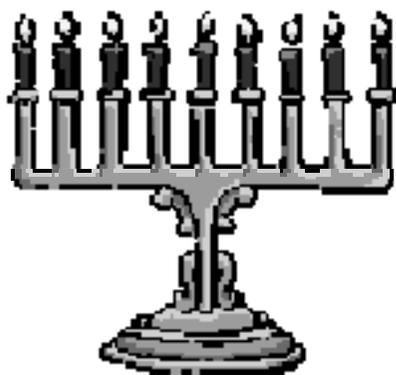
「なにが本当かなんて、誰に分かる？……こんな日記、みんな爺様の妄想かもしれないじゃないか。死んだじいさんよりも生きている我々が大事だ。そのくらい、おじいちゃんも分かってくれるさ」

「それじゃ、生きている元慰安婦たちはどうなるんですか？」
担任教師が叫んだ。高明は冷たい目をして応えた。

「先生、あなたの義務は教え子を守ることでしょ。公務員なんだから国の名誉を守る義務もある。この日記を公表することはどちらも破ることになるじゃないですか。よその国のばあさんたちのことなんか四の五

の言っている場合じゃないと思いますよ」

教師は憤然として席を蹴った。菊代は青ざめ、美保子はべそをかいた。その夜、高明は月夜の庭に出て祖父の日記を焼いた。彼にはなんの後悔もなく、朝までぐっすり眠った。それに引き換えて美保子は眠れなかつた。



洞のような目の奥に赤い火が燃えていた。

（おじいちゃんが鬼になった）
美保子はそう感じ、全身が冷たくなった。それから、鈴木家の周囲に夜な夜な鬼火が出るという噂が立った。祖母はたちまち衰弱し、祖父の後を追った。美保子はサッカー留学の名目で遠い全寮制の学校に転校し、菊代はノイローゼになって入院した。一人残された高明は（自分の信じる通りに行動したままで、なんの後悔もない）と相変わらず考えていたが、仕事の帰りに自宅の屋根の上で燃える鬼火を見るたびに、やるせない気持ちになるのだった。

真夜中、風にカーテンが揺れ、月光に照らされた足元に祖父の影が立つのを見た。その様子は泣いているようだった。美保子は起き上がって祖父の顔を見た。銀髪は逆立ち、空

青い波濤と白い龍

第四回

藤川博樹



■ 合宿・ホロウィッツ

食事が終わったあと、色白の村木と、小柄で眼鏡をかけた上野がプロレスのまねごとをやってふざけ合っていた。二人はもつれてころがり、雪崩を打って食卓に倒れかかった。打合せのため食事に遅れ、まだ手を着けられていない委員長若壁の席の碗がひっくりかえり、皿がちらばった。常三は部屋の隅でイヤホンをつけてラジオを聞いていた。ホロウィッツが数年ぶりにリサイタルを開くとすると音楽界では一つの事件で、ラジオ放送もされた。イヤホンからはスカルラッティのソナタが流れていた。

「あいつ、飯のことになるとうるさ

いからな」山下が手早くちらかった飯粒を集めて茶碗に盛り直し、おかずを整えて味噌汁をくみなおした。

山下は若壁と同世代の活動家で、頭が切れて目立ちたがりやで常に注目される若壁とは対照的に、若壁のそばでひたすら事務仕事をこなしてきた人間だった。だから、若壁の欠点や食事の好みなどを知り尽くしていた。この世界では演説がうまく一般の学生たちに向かってアジテーションできる才能が求められた。たとえばこんなシーンがあった。自治会の選挙のときに寮の一室の対策室に学生たちが集まってくる。山下が徹夜でロウ原紙にガリきりし、わら半紙に印刷し、準備した資料を配る。そこへ若壁がやってきて「では、今から意志統一します」と宣言する。集

まった学生たちが配られた資料に一齐に見入った。「なんだ山下はどうした」と言われた山下は、椅子に座ってうつむいて意志統一の輪に加わろうとはしない。「いや、おれが作ったから」とつぶやいた。内容について一番わかっているのは自分なのだから資料を見るまねをする必要はない。だが、その声はそばにいた常三にだけ聞こえた。鷹が油揚げをさらうのごとく、若壁は自分が用意したかのようにメリハリつけて大きな声で資料を読み上げ、学生たちに号令した。若壁のアジテーションは資料を読んでもけつして棒読みでなく、聞くものを高揚させる力があり、自分の深い思想に裏付けられた演説のように聞こえた。

山下が食卓を整えてしばらくする

と、委員長の若壁が遅れてやってきて席に着いた。学生たちが息をひそめてみていると、何か勘づいたように、若壁は「なんだ、これは」と言って立ち上がった。周囲の女子学生や新人の男子学生たちが啞然として見上げると、視線を気にしたのか、委員長の権威に関わりかと思っただか、若壁はふたたび席に着き、自分を納得させて食べ始めた。

食事のあと、ふたたび各部屋に分かれて議論の続きを始めた。

「なぜ民主主義革命なのか。その辺を討論したいと思います」と文学部から参加している池田が言った。

教科書に書かれているようなことを答えさせようとしているのが感じられて、常三はざつばくに答えた。

「それはアメリカとの関係じゃない

ですか」

「そうね、アメリカが大事だね」

そこで議論が中途半端に終わってしまつてはいけなもので、常三の班に参加していた執行部の江井が、やや足早に、人民が敵対している二つの敵について語った。二つの敵とは、アメリカ帝国主義と、日本独占資本主義だった。

常三には敵といわれてもなんといつても実感がなかった。実感のないものについて、自分の信じていないものについてお経のように唱えることが常三にはできない。

江井は、「日本は、アメリカ帝国主義と結んだ安全保障条約のもとでなかば占領状態にあつて、反独占の戦いだけでは革命を成就することはできない。だから、まずアメリカを日本から追い出す民主主義革命なのです」と言った。江井は、ピアニストを目指して芸大入学を志していたが、おじに言われて急遽目標を革命家に転換したという変わった経歴の持ち

主だった。江井が学生の自宅に電話

した時、本人が不在で親が電話に出て、「エイ」と名乗った。息子が帰つてから、子どもに取り次いだ親は、記号で「A」と名乗るとはなんと非人間的なのだと言ったというエピソードが伝わっている。

宗教・政治・会社などあらゆる団体がその教義や創立理念を持ち、その理念を構成員に徹底させることがその団体の構成員の忠義心を高め、組織を團結させ発展させるための要になつてはいる。敵が独占資本主義一つだけではないというのが、その教義の大きな特徴であつたが、学習も経験も足りない常三には頭から丸飲みに飲み込むことができなかった。

江井や若壁たち経験豊富な活動家たちは、その教義を信じ、あるいは活動家たちにその教義を信じさせて確信を持たせるのが組織発展のためには欠かせないと思つていたのである。う、学習指定文献を読んでいるか点検し、合宿その他の機会徹底させ

ようとした。

合宿に参加する前に、常三は意志を確認するためにビルの一室に呼び出されたが、質問には「資本主義社会は無駄が多い」と答えた。黒縁の眼鏡をかけた色白の根元担当委員は、「アメリカ帝国主義との闘争に勝利しなければ日本人民の幸せはないということですよ」と言った。あなたの言い方は言葉が不正確ですとたしなめられた。

根元とは、後に記念集会のパーティーのときにも会つた。根元は、やつてくると「いやー、安保延長反対・沖縄返還反対闘争のときには、わたしは学生中央委員会の議長をしていましたかね、大学から三千人の隊列を送り出したものでしたよ」と磊落そうに語つた。それで会話がとぎれた。根元はパーティーのときにはそのセリフだけしか言わないのだと常三は確信した。

反安保闘争に興味を持ってない常三は自分の学習不足に自信が持てず、

経験不足が不安だった。ホロヴィッツのカーネギーホールリサイタルの方にはるかに強い興味を持つていて自分が政治に向いていないのではなにかという疑問にさいなまれ、闘争に参加していく自信がなかった。



夏季特別作品

夏の風

蒲原ユミ子



「さよならあ！ でぶりん」

廊下の向こうでナツミたちが笑った。

教室から出ようとしていた恵は、かあつとあつくなつた。子ぶたのようになつた恵は、『でぶりん』と言われるのが一番いやだ。

「なによ！」

そばで、なかよしのさやかも怒つた。

「だめじゃあないの！ 人の体のこと、言っちゃあ」

ずつと向こうで、もう階段を下りかけていたナツミたちはとほけた。

「あら、せっかくさようならと言つたのに」

恵は、さやかも味方なので気が大きくなつてさげんだ。

「うそつき、キツツキ、しゃっきんとり！」

「からすにくわれて死んじまえ！」
恵は調子づいた。

「うそつきや、死んでもなおらねえ、あほうどり！」

さいごに、思いきり「べえっ！」とべろをつき出した。

ナツミたちは怒らないでわらつている。

恵は、ふつと横のさやかを見た。背の高いさやかが（しまった）という顔して恵の頭の上から手を引こめた。

恵は気づいた。さやかは恵の頭の上でクルクルパーをしてナツミたちと笑いあつていたのだ。

恵はがくと力がぬけた。ナツミたちにあだ名を言われたよりショックだった。恵はむすつとなつて昇降口に向かった。ナツミたちはさつさと消えてしまつていた。

恵は靴をはきかえ、うつむきながらひとり早足で家に向かった。

さやかが追いつき声をかけた。

「さつきはごめんね」

恵はうなずかない。一番の親友だ

と思つていたさやかに裏切られたのだ。さやかは背が高くて運動神経もいい。このごろは、一輪車の乗り方も教えてくれていたのに。そのさやかが恵にクルクルパーをするなんて・・

さやかは恵と並んで歩き、また、

「ごめんね」

と言つた。恵には「いいよ」という気にはとてもなれない。怒つたままぐいぐい歩いた。

さやかは、

「ごめん、ごめん」

と、うるさく繰り返しはじめた。その言い方は、恵には心から謝つてい

るのではなく口先だけだと感じられた。

（さやかちゃんは二重じんかくだわ。それに、なんでも『ごめん』ですんだらけいさつ、いらんわ）と、思いながら下を向いたままとつと歩いた。

真夏の太陽が二人にぎらぎら照り

つける。じつと湿つた暑い風が二人に吹く。

さやかは呪文のように『ごめん』と言いつける。

さやかの家が見えてきた。石塀が

続いた大きな屋敷だ。あしたは、その広い庭でさやかから一輪車を教えてもらうことになつてい

るのだけだ。さやかは自分の門に入る前にう

らめしそうに言つた。

「もう、995回『ごめん』を言つたのに、恵ちゃん

はゆるしてくれないのね」

恵はおどろいた。何回『ごめん』を言つたか覚えていたなんて！ 心がこもつていないわけだ。恵は唇をかみしめ、さやかの顔を見ないで家

に向かつて走つた。

翌朝。からりと晴れ、入道雲が山のはし

に見える。

きようは夏休み前の休みで宿題もなくて、一番嬉しい日のはずだ。

けれど、恵はふさいでいた。自転車をつら引っぱらだしたが、恵の家にいくのはためらわれる。きのはあんないやなわかれ方をしちゃたし、さやかももう恵に一輪車を教えてくれないかもしれない。

恵のお母さんは、「あなたは運動神経が鈍いからあぶないわ」と行って一輪車を買ってくれそうもない。今は、そういう問題ではないが。

となりの家との境のフェンスにかまらまった朝顔が、目にしみるような青い花を咲かせている。恵はふと思いついた。

(そうだ、菊丸のところへいこう！)
菊丸は、一人暮らしをしているキヨさんが飼っている犬である。キヨさんちまで自転車です五分。キヨさんは少しへんくつなおばあさんだけ、気がつかなくていい。

前は毎日のように行って菊丸とじゃれて遊んでいた。このごろはテスト続きで行けなかったけど。

恵は家にもどり、菊丸の好きなクッキーをポケットに入れてから自転車に乗った。

暑くなる前の、夏の気持ちいい風をうけながら、じきにキヨさんちに着いた。

門などはなく、自転車に乗ったまますうっと入っていきける。柿の下に菊丸の小屋がある。

けれど、菊丸はいなかった。恵を見ると、ちぎれるほどしつぽをふって飛びついてくるのに。



恵は自転車を通り柿の木の横にとめた。菊丸は屋敷の中を散歩しているのだろうか。キヨさんは菊丸を散歩連れ出すことはなく自由に庭を走らせている。菊丸は利口だ。知らない人には吠えるけれど、噛む犬ではない。

い。

恵は菊丸をさがしながらぐるっと屋敷をまわった。

家の南側に畑があり、キュウリやナス・トマトなどが実っている。トウモロコシが青空に向かってすくと伸び、つやつやした細長い葉に覆われたトウモロコシの髯がやわらかく垂れ下がっている。恵は、(去年はゆでたてのトウモロコシをもらって、うまかったなあ)と思い出した。

畑の奥には恵の知らない野菜も並んでいる。キヨさんは、(ひとりでごんなに食べられるのかしら)と思うほど、たくさんの種類の野菜を作っている。

それにしても、菊丸の姿が見えない。恵は玄関のほうにもどった。

その時、玄関の引き戸がガラリと開き、キヨさんがあらわれた。両手にだらりとなった菊丸をバスタオルごとかかえている。キヨさんはすこくこわい顔をしている。恵はぞつとした。

(菊丸が死んだ?)

キヨさんはびっくりしている恵に知らん顔で通り過ぎ、柿の木の後ろにある築山の前に行った。そこに、

菊丸をそつとおろす。菊丸は横たわったままびくりともしない。

(やはり、菊丸は死んじゃったんだ・・)

恵はおそろしかったけれど、菊丸をそつと見た。つやを失い、ぺたりとなった白い毛。胸のあたりはよごれたうす茶色になり、腹が少しふくらんでいる。

(もう、この体がむっくり起き上がってとびついてくることはないんだ・・)

恵に、死という実感が近づいてくる。

キヨさんは納屋からシャベルを持ってきて築山に穴を掘り始めた。キヨさんは小柄だが畑仕事できたえがかつちりした体だ。

そのキヨさんが汗を流しながら大型犬の菊丸がゆつたり入る大きな穴をほりあげた。

穴に、まずバスタオルを敷いてから菊丸を横たわらせた。

それから、キヨさんはポケットから菊丸の好きだった骨を出して顔のそばに置くと、やつと恵の方を向いた。

「ぼうつとつ立っていいないで、菊丸にお別れをせにやあ」

恵はあわてた。

「ああ、はい・・・」

キヨさんはしゃがんで手を合わせ、
「なんまいだぶ、なんまいだぶ・・・」
とつぶやき始めた。恵はポケットのクッキーを思い出し、骨のそばにおいてからしゃがんだ。両手を合わせて目をつむる。

(菊丸、どうして死んじゃったの?)

キヨさんはおがむだけおがむと、さつさと菊丸に土をかけ始めた。

さいごに、土の山をシャベルでぎゅっぎゅっとおしつけた。

それがすむと、納屋から竹の花さしを持ってき、近くに咲いていたオミナエシの花を手でぶちっと切つてさした。それを恵にさし出し、

「ほれ、水を入れてきて」

恵がだまって外流しの方へ向かうと、「もつと気をきかせて、自分からしてくれろといいがのう」と文句を言った。キヨさんのづけずけしたものの言いようはいつもだし、今の恵は心が重くて気にもしていられない。

恵が水を入れてもどつて来ると、

キヨさんは線香に火をつけていた。線香をそこらにあつた石ころに立てかけ、恵から受け取ったオミナエシと並べた。

それから、もう一度しゃがんで、

「なんまいだぶ」を唱え始めた。恵もキヨさんと並んで手を合わせた。

(・・・菊丸、いっしょに遊べて楽しかったよ。もつと遊びたかったよ・・・)

しばらくして、キヨさんは立ち上がり、さつぱりと言った。

「菊丸は死んじゃったけれど、あんたは気が向いたらまた遊びにきていよ」

恵の口から思わずついて出た。

「どうして菊丸、死んじゃったの?前は元気だったのに」

キヨさんはぎゅっくと口を結んでかと言った。

「腸ねん転かねえ、腹がふくれていだから。あつという間だったよ」

恵にはなつとくできない。

「菊丸はあたしと同じで、まだ8才だったのに」

茶色のしわ深い顔で、キヨさんは恵をにらんだ。

「生きているものは、必ず死ななく

ちやあならんのだわ」

そして、キヨさんはうらやましそうにつぶやいた。

「わしも菊丸みたいに一晩で死ねたらいいなあ」

恵がぎよつとすると、キヨさんは前歯が1本ぬけた黄色い歯並みを見せてにやりと笑った。

「けど、畑がもつたないから、わたしは100まで生きるつもりさ」

恵はほつとして聞いた。

「また、菊丸のすきなクッキーをもつて来ておそなえしてもいい?」

キヨさんはしぶい顔をした。

「クッキーにはア리가たかるけど、まあいいか」

恵も調子に乗った。

「菊丸のおやつ分、あたしが食べてやつてもいいよ」

「もつと、でぶりんになりたいのかい」

キヨさんは、ちやあんと恵のあだ名も知っている。

「もう、キヨさんたら!」

恵はこぶしでキヨさんをぶつまねをした。キヨさんはわざとしかめ面をして家に向かった。「でぶはでぶで、かわいいともあるかも知れんな」

とつぶやきながら。

恵は、その後姿に向かつて、「あつたりまえのすけ!」

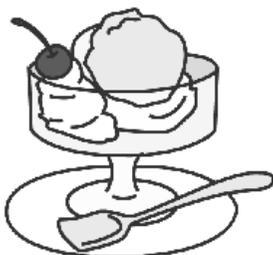
とさけび、ペロをつき出してあっかんべーをした。

恵はキヨさんに言いたいことを言つたら、なんだか気持ち軽くなつた。

柿の下にもどり、自転車に乗った。行き先は、さやかの家。

(さやかに、あたしから『ごめんね』と言わなくちやあ。あたしもナツミたちに思いきり悪口を言っちゃったんだから)

恵は力強くペダルをこぐ。夏の気持ちいい朝風を全身にうけながら。



今の家で暮らすようになって三〇年近くになる。これは私には実感の薄い、少し意外なことに思える。というのも、この家を建てるまで、同じ家に五年以上の歳月を送ったことがなかったからである。

父が国鉄に勤めていたため、生まれて以来、私は駅に附属する「官舎」を転々とした。いつ頃からか、国鉄

すなわち日本国有鉄道（JNR）が公社となり、「官舎」も正式には「国鉄宿舍」と称するようになったらしい。公社というのは、かつての「三公社五現業」のそれであって、この言葉は国鉄・電電・専売の「官」でない公社と、造幣・印刷・アルコー

ル専売・国有林野・郵政の「官」を指した。しかし、私達は以前の「官舎」に住んでいたので、どうも世間に対して「国鉄宿舍」と一々訂正し難かった。

天王寺鉄道管理局というのが父の所属で、おおむね紀伊半島を走る紀勢本線の駅を転々とした。和歌山県

の人に生い立ちを話す時、私はこう言うのが常だった。

「和佐で生まれて、下津で小学校へ入り、湯浅で小学校を卒業し、三重県熊野市の木本（きのもと）中学校へ入って、やはり三重県の尾鷲中学校を卒業し、尾鷲高校へ入って、古座高校を卒業した」と。

和歌山県の大まかな形は南北に長い長方形である。東に高野山、生石山、護摩壇山、果無山脈などがあり、西に紀伊水道があつて、その南に太平洋が広がっている。そして、北から順に、紀ノ川、有田川、日高川があつて、東の山間部から西へ流れている。三重県との県境に熊野川（新宮川）が北の大峰山脈・台高山脈を源として、太平洋へ流れている。他にも広川、富田（とんだ）川、日置（ひき）川などがあるが、他府県の人はいささか知らないであろう。紀ノ川・有田川・日高川にしても、有吉佐和子の小説の題名に使われてから知られるようになったのではないか。

大阪からは、紀伊半島の西海岸に沿って、和歌山、海南、下津、箕島（有田）、湯浅と南下する。そして、御坊を経て和佐に至る。和佐は日高川流域の小さな土地である。ここから、南部、田辺、白浜と更に南下し、潮岬のある串本を廻り、古座、勝浦、新宮と北上する。串本から先は紀伊半島の東海岸である。

三重県に入ってから、熊野市・尾鷲と続き、松阪、津などを経て、ついには名古屋に至る。熊野市だけ「市」を付けるのは、熊野は紀伊半島南部の広い地域を指す古代からの由緒ある地名で、新しく出来た熊野市を熊野と言ふ訳にはゆかないからだ。このような思ひは、行政の都合でつけられた新しい地名に対して、他の府県でも抱かれる思いに違いない。

鉄道では、和歌山から新宮までが約200・7キロ、新宮から尾鷲までが56・9キロ。この距離を大学生になるまでの私は家族と共に引越して廻つたのである。私が大学生になってからも、父の転勤は続いた。

大学へ入る前、予備校へ通うために大阪市内で下宿した。その一年間に平野区の下宿から天王寺区の下宿

へ移った。大学生になってからも東住吉区の南田辺という所から住吉区の杉本町へと下宿を引越した。大学を卒業して、就職・結婚してからも、和泉市、泉南郡深日町、京都市西京区、泉南市と毎年のように引越した。意識せぬ間に、放浪癖が染みついていく訳でもあるまいに。

若い時分は、引越しを何でもなれと思っていた。南紀は雄大な自然と美しい景色の宝庫である。引越す度に新しい土地を歩きまわれることは楽しかった。夏・冬・春の長い休みには別れた友人と再会する。人生や学問や読んだ本について話し合い、いずれかの家で徹夜することは私の青春そのものだった。

その後、初めに書いたように、同じ家で三〇年。何かを求めようという気持ちが生まれ、それが知らないうちに少しずつ膨らんで、紀伊半島の上に、いつまでも特定できぬ「ふるさと」を探していることがある。引越しばかりで「ふるさと」のない自分——その生い立ちには、みなし児のようで空しい寂しいものではないか……。そう考えてみたりする。思いがけないことである。

紙芝居のほんわかたのしい世界(1)

蒲原雅人

■月に1度くらい娘たちの通う小学校で読み聞かせのボランティアをやっている。朝、15分間だけ時間をいただいで、対象年齢に合わせた絵本や児童文学作品を読み聞かせるといふもので、地域のお母さんたちの主導である。町の図書館や隣町の図書館などで紙芝居を探してくる。若い頃、目白にあった子どもの文化研究所の紙芝居サークルのひとたちと関わったことがあり、紙芝居を演じるおもしろさも少しは知っていた。少しずつやり方も思い出し出てきて、子どもたちのよるこぶ顔や笑い声に、人間の生きるエネルギーを感じてあらためて紙芝居の持っている力に気が付かされた。同時に、この隠れたおはなしの宝庫を未知の方々にも紹介したいな、と考えたのである。

- 「トラゴロウとふしぎなはこ」
- 文・小沢 正 絵・おぼまこと
- 制作 NHKS・S
- 発行 学習研究社



- 好感度 ★
- 文 ★
- 絵 ★★
- 反応 ★★★★★ ……小4年

■意外性に満ちているところが子どもたちに大うけする。主人公はものぐさなトラで、猟師なんかはへとも思っていない。展開はじつにシユールで、こんなわけないだろう、という常識無視の強引き。そこがまた子どもたちの想像力を刺激するようだ。動物対人間のありきたりな物語りの枠をはるかに越えて、猟師はトラゴロウに食べられてしまうし、いったいなんのためにあれこれ画策したのか、合理的な説明はいっさいない。ナンセンスさで子どもたちのところをつかむ。

- 「はかせとロボット」
- 原作・星 新一
- 文・たなべまもる 絵・横川康夫
- 制作 NHKS・S
- 発行 学習研究社
- 好感度 ★★
- 文 ★★
- 絵 ★★★★★
- 反応 ★★★★★ ……小4年

■意外性という意味では「トラゴロウ」に負けていないようだが、ここには原作者の諷刺精神が息づいており、高度な文明批評があることで、その分、ムズカシクなっているのかもしれない。演じる点で、はかせのこっけいさや、ロボットの無機質性が押し出せば作品にメリハリがある。中間がダレルので現代風のギャグを交えるのもいいかも。絵は作品の持ち味を生かして効果的だ。個人的にはたいへん好きな画風である。



(二〇〇六・七・四)